

〈研究・調査報告〉

「観光教育における実践型教育」実施の
社会背景・教育効果と課題
—「フェスティバルを通じて学ぶ観光商品づくり」の
実践型教育を事例として—

于 航

【要旨】

本稿では、観光教育における「実践型教育」の重要性を、社会的背景や教育効果をPEST分析（政治的、経済的、社会的、技術的視点）を用いて検討し、その現状と課題を明らかにする。政府による観光政策の推進や観光産業の成長、地方創生への期待、技術革新を背景に、「実践型教育」の必要性は一層高まっている。本研究では、フェスティバルを活用した観光商品開発の事例を通じて、「実践型教育」が学生の計画力、柔軟性、創造力、リーダーシップなどの非認知能力を向上させる教育効果を検証する。さらに、観光教育における理論と実践の融合が観光産業を支える複合型人才の育成にどのように寄与するかを論じる。

キーワード：実践型教育、観光教育、PEST分析

1. はじめに

観光産業は国内外で急速に成長を遂げ、多くの地域で主要な収入源としての役割を果たしている。一方で、労働力や教育水準の質が追いついていないという課題も顕在化している。このような社会背景の下、観光教育の役割はますます重要となっている。

「観光学」という学問の特性や教育内容の変遷、さらに社会的ニーズに鑑みると、教室内での理論学修が不可欠であると同時に、現場での体験を通じたアクティブラーニングの必要性が高まっている。具体的には、PBL（Project-Based Learning）やホスピタリティ精神の醸成、産学連携教育、企業インターンシップ、イベント参加、観光商品開発など、多様な実践型教育が観光教育の現場で展開されている。

本稿では、PEST分析を通じて観光教育における「実践型教育」の社会背景を考察し、その教育効果および課題を明らかにすることを目的とする。

2. 観光教育分野における「実践型観光教育」の位置づけと分類

2.1 コロナ禍後の観光教育

2019年に訪日外国人観光客は3,188万人を記録し、観光産業は日本経済の重要な柱となった。しかし、2020年から2022年にかけてのコロナ禍により、観光産業は深刻な打撃を受けた。それでも2023年には訪日外国人旅行者数が約2,506万人に回復し、2024年には3,338万人と過去最多を記録している。コロナ禍後、観光産業の成長が目覚ましい。

インバウンド好調の理由を探ると、アジアのZ世代を中心に日本文化（J-POPやアニメ）への関心が高まっていること、さらに「買い物」から「体験」へとシフトした観光スタイルが訪日客の増加に寄与していると考えられる。このような背景のもと、観光教育の現場では即戦力となる人材の育成が急務となっている。

観光教育プログラムの充実、異文化理解力やトラブル対応能力の育成、理論と実践の融合を通じた「実践型観光教育」の必要性が高まっており、本教育は学生にとって、業界の現実を知る機会を提供し、将来のキャリア選択にも資するものである。

2.2 PEST分析による「実践型観光教育」の背景の検討

PEST分析は政治的（Political）、経済的（Economic）、社会的（Social）、技術的（Technological）要因を包括的に検討するフレームワークであり、観光教育を取り巻く社会背景の体系的な認識に有効である。

（1）政治的要因（Political）

日本政府は観光産業を経済成長戦略の一環と位置づけており、「観光立国推進基本計画」や「訪日外国人旅行促進戦略」を推進している。また、ビザ発給の簡素化や観光特区の設置など、規制緩和による観光産業の活性化を図っている。このような政策は、観光教育における実践型プログラムの推進を後押ししている。

加えて、地方では少子高齢化が進行しており、地域文化や観光資源を活用した地方創生活動への期待が高まっている。この背景において、学生が地域住民や自治体と連携する実践型教育は、観光人材の育成と地域活性化の両面で重要な役割を果たしている。

（2）経済的要因（Economic）

2023年の観光分野におけるGDP貢献度は41兆円に達し、新たに約47万人の雇用を創出した。一方、少子高齢化による労働力不足が顕在化しており、特に地方では観光サービスの低下や持続可能性が課題となっている。このような状況に対応するためには、教育機関と観光産業の連携が不可欠である。

（3）社会的要因（Social）

訪日外国人観光客の増加に伴い、観光業界では外国語能力や異文化理解力、ホスピタリティスキルを持つ人材の需要が高まっている。また、観光スタイルが団体旅行から個人旅行や体験

型旅行へと変容しており、学生は現場のニーズを理解するための実践的な経験が求められる。

(4) 技術的要因 (Technological)

観光DX (デジタルトランスフォーメーション) の推進により、AI、IoT、ビッグデータなどの技術が観光産業において重要な役割を果たしている。こうした技術の活用に対応するため、実践型教育は不可欠である。

表1 「実践型観光教育」実施の社会背景におけるPEST分析

政治的要因 (Political Factors)		経済的要因 (Economic Factors)	
● 観光は日本経済の成長や地域の持続的な発展に欠かせない要素 ● 日本政府は観光産業を経済成長戦略の柱の一つとして位置づけ ● 各種の観光政策・規制緩和を推進 ● 観光教育における実践的なプログラムの導入が後押された ● 地域文化の継承、観光商品の提供など、地域活性化活動が期待される 結論 地域連携プロジェクトや実践型観光教育プログラムが必要	P	● 日本経済GDPに観光分野が大いに貢献 ● 観光産業の成長と経済的インパクトが大きい ● 訪日外国人による旅行消費が最高を更新 ● 観光産業の現場では、マンパワーが追いつかない ● 質の高い観光人材の育成が経済的な競争力を維持 結論 さらに見込める観光産業の成長のニーズを満たすため教育機関との連携が不可欠	E
	S		T
● 観光業界が抱える人材不足や労働環境の課題が顕在化 ● 観光客のニーズが多様化・国際化 ● 地方観光への誘致が不十分 ● 地域課題に対する理解を深めることが可能 ● 地方創生の一環として期待される 結論 学生が地域住民や自治体との連携、地方の観光資源を発掘・活用する経験を得る実践型教育は社会問題の解決に繋がる		● 観光DXを推進 ● デジタル技術の進化は観光産業へ大きく影響 ● 各種のデジタル技術の実験経験を積むことが必要 結論 デジタル化が進む観光業に対応できるスキルを身につけるため、実践教育が不可欠	
社会的要因 (Social Factors)		技術的要因 (Technological Factors)	

(注) 筆者整理・作成 (2024)

以上(表1)のように、PEST分析を通じて観光教育における「実践型教育」の重要性が明らかとなった。観光政策や技術革新を背景に、観光業の持続可能な発展と競争力向上に寄与する教育プログラムの充実が期待される。また、非認知能力の育成を重視した教育のさらなる深化が求められる。

2.3 観光教育分野における実践型教育の分類

観光教育分野における実践型教育の分類については特に定めていない。国内外の事例を鑑み、筆者は以下のようにタイプ分けして整理した。

(1) 海外における取り組み——インターンシップ制度

イギリスにおいて「観光 (Tourism)」は、1950年代までは「学問 (subject)」というよりも「産業 (industry)」、すなわち理論ではなく反復される行動としての認識が強かった (朝倉ら, 2006)。そのため、オックスフォード大学やケンブリッジ大学のような伝統的な大学では長らく学問領域としての観光を認めていなかった。しかし、20世紀以降に設立された比較的新しい大学においては、新たな学問領域の開発機会と位置付けられた経緯がある。

アメリカやヨーロッパでは、観光教育においてインターンシップ制度が重要な役割を果たしており、ホテルや旅行会社での長期的な実習プログラムを通じて学生は業務プロセスを直接体

験し、即戦力としての能力を養成している。特に、スイスのホテルスクールはその実践型教育の質の高さで広く知られており、観光教育の模範として位置付けられている（折戸ら、2014）。

（2）台湾・マカオ・香港・中国における取り組み——学内実施型のフード&ビバレッジ（F&B）オペレーション教育

台湾、マカオ、香港、中国の観光教育においては、大学内で実践的な教育プログラムを設ける例が多く見られる。具体的には、航空機の機体を模した施設を利用してエアライン関連の知識を学ぶほか、調理実習室を活用して料理技術や飲料の知識を習得するプログラムが実施されている。特にワインやお茶、コーヒーに関する知識とテイスティングの実践型教育を含むこれらの取り組みは、観光業界に直結した専門的なスキルを育成する点で注目される。

（3）日本における取り組み——地域観光資源を活用した地域連携プロジェクト

日本においては、地域住民や自治体との連携を通じて、学生が観光ガイドや地域イベント運営、観光商品の開発に直接関わる機会を提供する地域連携型プロジェクトが展開されている。このような実践的なプログラムにより、学生は地域社会のニーズを深く理解し、観光資源の持続可能な活用方法を学ぶことができる。また、理論と実践を融合させた教育効果を高めることが可能である（郭ら、2021）。

（4）地域・国内外における地域交流・国際交流を活用した教育プログラム

観光産業の多様化および国際化の進展に伴い、企業や地域の理解、外国語能力、異文化理解などのスキルは、観光教育における必須要素とされている。このため、地域交流および国際交流を通じて観光教育の質を向上させることが重視されている。これらのプログラムは、観光業のさらなる発展を支える複合型人才を育成する上で、極めて重要な教育手段として認識されている。

表2 城西国際大学観光学部の実践型観光教育の取り組み（2024）

分類	実施主体	関連科目名	概要
オペレーション （実務教育）	教育機関	観光実務 フィールド基礎演習	ホテルビジネス基礎 「道の駅」視察
地域連携 プロジェクト	教育機関＋ 地域の諸団体	観光プロジェクトA・B 観光ゼミナールA・B・ C・D 域学共創プロジェクトA～J	「エアライン」「空港」「ホテル」 実地見学 千葉県鴨川市四方木地区、館 山市、芝山町、白子町、成田 市との地域連携 「道の駅と大学」サイクルツー リズム企画
インターンシップ	教育機関＋企業	インターンシップ（国内） インターンシップ（海外） インターンシップ（長期）	国内のホテルと行政 マレーシアと台湾
研修・留学	教育機関（自）＋ 教育機関（他）	国内研修 海外研修A・B・C 海外留学（JEAP・交換）	北海道・四国地方 韓国・タイ・ハワイ 海外連携大学

（参考）学生便覧2024年度により筆者整理・作成

上記表2のように、城西国際大学観光学部は2006年に千葉県鴨川市に設置され、「観光地にある観光学部」というスローガンのもとで、「地域」と「国際」の視点を取り入れたグローバルな実践を重視した教育内容を展開している。その後、キャンパスが九十九里地域へ移転したことで、実践型教育の対象地域がさらに拡大されている。現在における同学部の取り組みについては、表2にまとめた。

3. 実践型観光教育の教育効果—フェスティバルを通じて学ぶ観光商品づくりを事例として

3.1 実践型観光教育の事例

実施科目：観光ゼミナール

指導教員：于航

参加学生：18名

タイプ：オペレーション（実務教育）、地域連携プロジェクト

テーマおよび目的・主な内容

「テーマ」：「フェスティバルを通じて学ぶ観光商品づくり」

「目的」：本活動は、「外部視点を取り入れた潜在的着地型観光コンテンツ造成」をテーマに、提案型研究を通じた観光商品づくりを目指したものである。本研究では、観光まちづくりの中核となる「着地型観光商品造成」に焦点を当て、地域に眠る潜在的観光コンテンツを発掘し、域外・異国・異文化の視点を取り入れることで、新たな観光商品モデルやイベントの提案を行うことを目的とした。

「実施手順」：2025年度「白子町秋空まつり」への出店を視野に入れた試験的運営を目的とし、第33回JIUフェスティバルにおいて観光資源としての文化体験とエンターテインメント性を融合させた実践的活動を①コンセプト検討 ②計画策定 ③コンテンツ開発 ④市場投入前チェック ⑤PR・販売 の手順で展開した（図1）。

具体的には以下のように進行した。

I 地域調査の実施（4月～7月）

白子町の発展史や観光の特色について文献や町史を活用し、詳細な調査を実施。

II 現地体験と調査（5月）

白子町の地理的条件、温泉、テニス民宿、たまねぎ狩りなどの観光資源を実際に体験し、現地調査を通じて潜在的観光コンテンツを発掘。

III 観光商品モデルおよびイベント内容の考案（11月）

観光商品やイベント内容を企画・造成し、コンテンツ造成やイベント運営手法を学習。その後、第33回JIUフェスティバルにおいて市場投入前のチェック、PR活動、および販売を実施。

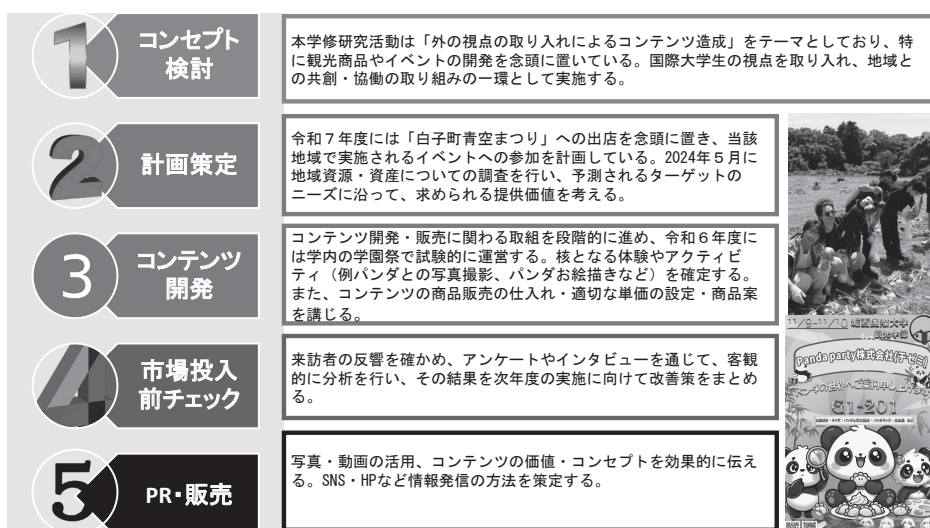


図1 観光商品づくりの手順

（注）筆者整理・作成（2024）

IV 成果の検証

フェスティバル期間中に約200名以上の来場者を迎え、来場者との交流や商品提供を通じて観光商品づくりや企画運営を実践的に学習。これを踏まえ、次年度の活動に向けた提案を試みた。

本取り組みを通じ、学生は地域の潜在的観光資源の発掘から商品化、さらにイベント運営に至るまでのプロセスを一貫して経験し、観光商品造成に関する実践的スキルを習得する機会を得た。

3.2 実践型教育の効果

3.2.1 実践を通じての提案力

餃子の提供、パンダグッズの販売、体験型アクティビティを組み合わせることで、観光資源としての魅力を発信した。SNSを活用した写真撮影エリアや「参加型体験」の工夫により、多くの来場者を集めることに成功した。



写真1 フェスティバルを通じて学ぶ観光商品づくり

（注）筆者撮影（2024年11月）

本試験的な運営を通じて、学生主体の企画・運営による地域社会および来場者との交流を促進するとともに、観光商品開発に必要な計画力、創意工夫、チームワークなど、いわゆる「非認知能力」の向上を目指した。

表3 試験的な観光商品づくり運営を通じた本運営への提案

カテゴリ	内容	提案
食文化体験	本場の水餃子提供	次年度は白子町産玉ねぎを使用する餃子販売を提案
体験型企画	油絵制作、 お絵描き体験コーナー	次年度は白子町の風景をテーマとする油絵制作を提案
展示と交流	クイズ、パネル展示	「外の視点」好評を受け、次年度は更に深化させることを提案
SNS活用	写真エリアの設置	観光商品のPRに繋がり、次年度は更に強化することを提案

(注) 筆者整理・作成 (2024)



写真2 食文化体験

(注) 筆者撮影 (2024年11月)



写真3 体験型企画

(注) 筆者撮影 (2024年11月)



写真4 展示と交流

(注) 筆者撮影 (2024年11月)



写真5 SNS活用

(注) 筆者撮影 (2024年11月)

3.2.2 チームワークと個人の成長

各メンバーがリーダーシップやフォロワーシップを発揮し、役割分担を通じて協力体制を構築した。これにより、計画性や効率的な運営の重要性を実践的に学ぶ機会となり、個々の課題も明確になった。成長した点について、学生の事後報告書による「自己評価」と教員による「定性評価」の結果、表4のようにまとめる。

表４ 「フェスティバルを通じて学ぶ観光商品づくり」の実践型教育の教育効果

担当	役割	活動内容	非認知能力の養成
A氏	企画・リーダー	教室展示申請・装飾、テーマ設定の調整と実行。餃子販売の宣伝活動で成果を挙げたが、情報共有不足が課題に。	対自己 達成感 成長 自信 対他者 調整 協力 対課題 企画力 リーダーシップ力
B氏	調理担当	水餃子の提供において茹で時間管理を工夫し、効率的な運営を実現。	対自己 不安 挑戦 達成感 対他者 責任感 協力 交流 リーダーシップ力とフォロワーシップ 対課題 問題認識と解決力 効率重視
C氏	装飾と宣伝	風船やリボンを使ってイベントアーチ作成。	対自己 不慣れ 満足 達成感 対他者 チームワーク 団結力 対課題 創意工夫 事前準備の大切さ
D氏	クイズ解答・記念品配布	クイズの運営、記念品（紅葉のしおり）の配布。来場者の熱心な参加に応えた。	対自己 苦労 忍耐力 満足 達成感 対他者 来場者との交流 スタッフとの調整 対課題 創意工夫 回遊性 滞在時間
E氏	ポスター制作	パンダや餃子をデザインに取り入れたポスターを制作し、イベントの魅力を視覚的に伝達。	対自己 挑戦 達成感 対他者 貢献 対課題 理解 伝達 テーマ性とデザイン性の両立
F氏	接客担当	来場者への丁寧な対応と商品説明を実施し、コミュニケーションスキルを発揮。	対自己 経験を活かす 挑戦 達成感 対他者 コミュニケーション力 協力 対課題 予測力 在庫管理
G氏	総務担当	ビデオ映像編集や会計業務を担当。価格設定や会計管理の難しさを経験。	対自己 挑戦 達成感 成長 対他者 責任感 リーダーシップ力 調整 対課題 会計 編集力 改善
H氏	展示室受付	来場者を笑顔で迎え、チームワークを活かして運営に貢献。	対自己 苦労 満足感 成長 対他者 柔軟性 忍耐力 責任感 フォロワーシップ 対課題 細部への配慮 全体の調和
I氏	お絵描き体験コーナー担当	来場者と協力してパンダの絵を完成させる体験を提供。着ぐるみ業務も遂行。	対自己 挑戦 満足感 対他者 責任感 フォロワーシップ 対課題 創意工夫 リスクマネジメント 計画力
J氏	全体調整	チーム内の役割分担や物流調整を行い、会場レイアウトの工夫に注力。	対自己 達成感 満足感 対他者 調整 リーダーシップ力 対課題 行動力 計画力

（注）学生の事後報告書と教員評価シートより作成

「フェスティバルを通じて学ぶ観光商品づくり」における実践型教育の成果から、対自己・対他者・対課題の３つの視点に基づいて、チームワークと個人の成長が確認された。特に、「達成感」「リーダーシップ力」「成長」「責任感」「創意工夫」など、座学では測りにくい「非

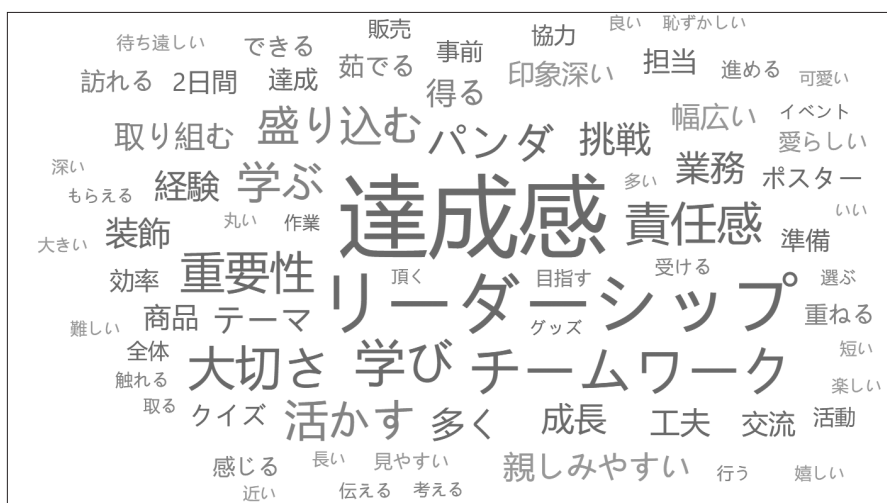


図2 学生の事後報告書と教員評価によるキーワードマイニング分析
(注) 事後報告書と教員評価シートより作成

認知能力」の向上に効果があったことが認められた。

3.2.3 SDGsへの貢献

実践型教育は教育現場だけでなく、地域や社会にも多大な影響を与える。本活動は以下のSDGs目標の実現にも寄与した。

SDGs目標4「質の高い教育をみんなに」

本活動では、白子町を研究対象とした現地活動を背景に、理論と実践を結びつけた教育を提供した。試験的な運営活動においては、企画、接客、ポスター制作など多岐にわたる業務に取り組むことで、計画力、実行力、チームワークを身につけることができた。

SDGs目標11「住み続けられるまちづくりを」

大学と地域（白子町）の連携を通じて、持続可能な観光商品やまちづくりへの意識を高める取り組みを行った。このような産学官連携によるまちづくりと地域振興が期待される。

SDGs目標3「すべての人に健康と福祉を」

来場者が笑顔で交流し、楽しめる空間を提供することで、心の健康や地域コミュニティの活性化に寄与した。

観光教育における「実践型教育」は、観光業界で求められる具体的なスキル（ホスピタリティ、コミュニケーション能力、問題解決力など）を現場で学ぶ機会を提供し、即戦力となる人材の育成に寄与する。また、地域資源を活用したプログラムでは、学生と地域社会が協力して観光資源の発掘や活用を行うことで、地域課題を解決し、地域活性化に貢献するという地方創生とのシナジー効果も期待できる。

4. 実践型教育が抱える諸課題

観光教育分野における実践型教育は、現場での実践的スキルの習得、地域社会や産業との連携強化、さらにはインバウンド観光に対応可能なグローバルな視点の醸成といった多様な可能性を秘めている。一方で、その実施にあたっては以下のような課題が存在する。

第一に、実践型教育の実施には時間的・物理的制約が伴う点が挙げられる。現行の時間割や授業時間内での実施が困難である場合が多く、指導教員および学生に時間的・体力的・財政的な負担が生じる可能性がある。これらの課題を解消するためには、外部からの財政的支援や制度的な整備が必要不可欠である。

第二に、教育効果の検証手法と評価基準の均一性が十分に確保されていない現状がある。特に、「定性評価」に偏重していることが指摘されており、「定量評価」を補完する具体的な測定指標の導入が求められる。これにより、実践型教育の効果をより客観的に検証することが可能となる。

第三に、実践型教育プログラム（地域連携プロジェクト、インターンシップ、研修留学など）における教育内容の質の均一性を担保することが課題となっている。各プログラムの持続性や地域間の格差を考慮し、期間や達成目標を明確化するとともに、教員の専門性を活用した組織間の連携体制を強化する必要がある。

最後に、「実践型教育」と「理論型教育」の乖離が懸念される。観光教育においては、基礎理論を学んだ上で実践型教育に進むことが一般的であるが、問題解決能力や応用力を育成する観点からは、実践型教育で得られた成果を理論に昇華させる「フィードバック」の重要性が指摘されている。そのため、カリキュラム上においては「理論→実践→理論」という循環的枠組みを設定し、両者を有機的に連携させた教育内容と目標を検討することが求められる。

5. むすび

観光教育分野における実践型教育は、学生の即戦力向上にとどまらず、観光業界全体の発展、地域の活性化、さらには国全体の経済促進にも寄与する重要な教育方法である。特に、グローバル社会においては、多様性を尊重し、寛容に受け入れる精神を育成することが重要視されている。「観光活動」を通じ、個人間、地域間、国際間の問題解決能力を養うことが期待されている。

また、人工知能（AI）の進化に伴い、従来の「偏差値重視型」の教育方針から、「非認知能力」を強化する教育方針への転換が必要とされている。多種多様な実践型教育プログラムの開発が今後ますます求められると考えられる。その充実には、観光業の持続可能な発展と競争力向上に寄与するだけでなく、学生主体の企画・運営を通じて、計画性、柔軟性、忍耐力、責任感、創意工夫、リーダーシップ、フォロワーシップといった「非認知能力」の向上をもたらす

ことが期待される。本研究では、フェスティバルを活用した観光商品開発の事例を通じて、「実践型教育」が非認知能力を向上させる教育効果が認められたものの、「実践型教育」には依然として多くの課題が残されている。教育手法の改善、カリキュラム上の位置づけ、評価フィードバックの体系化などが挙げられ、今後これらの課題に取り組むことで、観光教育における実践型教育の更なる発展と、その社会的貢献の拡大を期待したい。

【参考文献】

- 朝倉はるみ・梅川智也（2006）「海外における観光教育機関に関する基礎的研究 ―アジア・豪州編」
第21回日本観光研究学会 学術論文集, pp. 9～13
- 折戸晴雄・大藤正・永井一志・根木良友（2014）「日米欧豪亜5地域の観光専攻大学のカリキュラム
比較調査を通じた日本の観光人材育成に関する考察」玉川大学経営学部紀要 第23号, pp. 23～37
- 郭潔蓉・杉本雅彦・森下一成・金塚基（2021）「専門演習における産学連携事業を活用した実践型教育の導入」東京未来大学研究紀要 Vol.15 2021.3, pp. 181～189
- 「九十九里地域での実践型観光教育：白子町での取り組み」（2024）城西国際大学観光学部,
<https://www.jiu.ac.jp/eng/tourism/news/detail/id=16908> 2024年12月アクセス
- 「フェスティバルを通じて学ぶ観光商品づくり～成長を促す実践型教育～その1」（2024）城西国際大学観光学部, <https://www.jiu.ac.jp/tourism/news/detail/id=18191> 2024年12月アクセス
- 「フェスティバルを通じて学ぶ観光商品づくり～成長を促す実践型教育～その2」（2024）城西国際大学観光学部, <https://www.jiu.ac.jp/tourism/news/detail/id=18192> 2024年12月アクセス
- 観光白書（令和6年度）「観光の動向」（2023）観光庁,
<https://www.mlit.go.jp/statistics/content/001748858.pdf> 2024年12月アクセス

The Role, Educational Effects, and Challenges of Experiential Learning in Tourism Education: A Case Study of Learning Tourism Product Development through Festivals

Hang Yu

Abstract

This paper examines the importance of experiential learning in tourism education by analyzing its social context and educational effects through PEST analysis (Political, Economic, Social, and Technological perspectives), while also identifying its current state and challenges. Against the backdrop of government tourism policies, growth in the tourism industry, expectations for regional revitalization, and technological advancements, the necessity of experiential learning has grown significantly. Using a case study of tourism product development through festivals, this research explores how experiential learning enhances students' non-cognitive skills, such as planning ability, adaptability, creativity, and leadership. Furthermore, it discusses how the integration of theory and practice in tourism education contributes to the development of multi-skilled professionals who support the tourism industry.

Keywords: Experiential Learning, Tourism Education, PEST Analysis